

現代のことはば

こはら
小原 克博



「禁断の木の実」とは、一般的に、抗しがたい誘惑を意味する。頭ではいけないとわかっていても、ついつい手を出してしまつような、心を魅惑するものは、いつの時代も存在していた。ちなみに、この言葉が由来する物語は旧約聖書の冒頭にあり、その木の実はいかにもおいしそうで、目を引きつけ、賢くなるように唆していた」（創世記三章六節）というのだから、この種の誘惑とのつきあいは、人類史と同じだけの長い歴史を持つているといふことであらう。

「長い」と言えば、アップル社の高機能携帯電話 iPhone の発売当日、東京のある販売店の前で千五百人を超す長蛇の列ができたという先月の出来事が思い起こされる。このように言うと、いかにも他人事のように聞こえるが、実は私も、仕事が終われば並びたかつたくらいに、iPhone に関心があった。

iPod に代表される携帯音楽プレーヤー等で、大学の授業配信を行ってきた私としては、この種の新製品には単にハイテ

禁断の木の実 — iPhone 狂想曲

ク機器としての魅力を感じるだけでなく、情報教育研究内容の新しい伝達の可能性を喚起するものとして関心をそそられる。

iPhone の発売当日、数件の販売店を回った私は「次回納期未定、予約不可」という冷たい言葉を返された。予想していたとはいえ、この対応に意気消沈し、また、ニュースで大げさも言えるほどに流された iPhone をめぐる世界各地での熱狂を見るにつけ、かえって私の購買意欲は萎えてしまった。

機器の功罪を論じてきた私には、iPhone はまさに「禁断の木の実」であった。ありがたいことに、アップル社のロゴ（かじられたリンゴ）は、そのことを直感的に教えてくれる。世間の熱狂を冷やかに眺めること数日、買い物帰りに、たまたま通りがかつた携帯ショップで冷やかしかつた半分に「iPhone ないですよ」と尋ねた。そこで予期せぬことに「ありますよ」との返事を耳にし、一気に狼狽することになった。自分には必要ない、と言いつつ聞かせていたにもかかわらず、わずか数秒の葛藤の後、目の前の「禁断の木の実」の誘惑に屈してしまつた。実にあつけない幕切れである。禁断の木の実にまつわる失楽園の物語を追体験したかのような出来事であつた。

人間の欲望は、便利な技術、魅力的な道具を絶えず求める。そして、生み出され、作り出されたものを手にすることによって、人間はさらに欲望を膨らませていく。技術と欲望の無限上昇のスパイラル（らせん）構造は、ついに地球環境や人類の未来に甚大な影響を及ぼすほど巨大なものになつてしまつた。

最後はやはりリンゴに関連する言葉で締めくくろう。「たとえ明日、世の終わりが来ようとも、今日、私はリンゴの木を植える」（M・ルター）。リンゴをかじるだけでなく、リンゴを植える努力を続けることで、人は手にしている恩恵の代価を支払うべきなのだと思う。

（同志社大教授・キリスト教思想）